

國學院大學學術情報リポジトリ

コミュニケーションにおける状況の文脈再考：
特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ベケシュ, アンドレイ, Bekeš, Andrej メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000421

コミュニケーションにおける 状況の文脈再考

アンドレイ・ベケシュ
Andrej Bekeš

1. はじめに

A : 私には14歳の息子がいます。

B : まあ、大丈夫です。

A : 犬もいます。

B : 大変申し訳ありませんが、難しいです。

Giddens (1989: 94) より

上記が何の会話か、そのやり取りの意味は社会的文脈なしにはなかなか理解できない (Giddens 同上)。言語現象が文脈とどう関わっているかは、19世紀の終わり以来、言語の科学的研究の進路に大きく影響を与えた。

言語学が科学的厳密さと普遍性を求めて進んできた道の一つは、言語現象の考察の範囲を狭める脱コンテクスト化である。de Saussure の死後に刊行された『一般言語学講義』(仏: Cours de linguistique générale) は、社会的文脈の重要性を強調しているが (de Saussure 1916/1966 : 77-78参照)、de Saussure が具体的にどのようにコミュニケーションを想像していたのかは、下記の図1でよく分かる。この立場の批判は Bourdieu 1982/1991 : 32ff、Kress and Hodge 1995 : 15ff、Hasan 2009 : 167ffを参照。一方、Čermák1997 の評価はより寛大である。



図1 “Les têtes parlantes” (対話する頭たち、de Saussure's 1916/1966: 11-12)

de Saussureの半世紀後、Chomsky はその影響力のある著書『Aspects of the theory of syntax』（1965）で、学術的探求の便宜をはかって、「理想的な話し手」（ideal seaker）という理想化された文脈抜きの話し手を導入したことで、図1の頭の数が一つだけに減らされてしまった。Chomsky の批判は Hasan（同上）、Bourdieu（同上）を参照。

一方、20世紀の前半、ロシアにおける社会的動乱という歴史的な文脈の中で、言語をその社会的文脈で捉える必要性に目覚めた研究者がいた。Bakhtin、Vološinov、およびそのサークルがそうである。この独創的な思想家たちは、de Saussureよりも W. Humboldt の考えかたに触発されながら、やがては両方を越えた（Matejka 1973：167-169）。さらにはプラハ言語学派の Mathesius、Vachek、Skalička、Jakobson 等、（cf. Čermák 1995、Toman 1995）やロンドン学派の Firth、Halliday 等（Halliday 1978：27ff参照）も、言語の社会的文脈に強い関心を持っていた。これに付け加えて、Garfinkel、Goffman、Bourdieu（Giddens、1989参照）などの多くの文化人類学者や社会学者も、社会的文脈の中の言語に強い関心を示していた。

興味深いことに、言語研究の異なった伝統から生まれた日本の言語学もまた、社会的文脈の中の言葉に関する先駆的な研究を生み出した。その中で特記すべきは、テキスト・談話の文脈と関わる日本語の構文の変遷を究明した林四郎（1973）の研究、そして現代日本語の構造と社会的文脈との関わりを究明した南不二男（1974）の研究である。最近の「キャラ」の研究（定延 2015、2018a,b）や役割語の研究（金水 2018、金水編 2007）もまたオリジナリティに富んでいる。

本稿では、言語現象を捉えるために適切と考える文脈がどのように想像されてきたかといういくつかの代表的な試みについて、簡単に触れたい。同時に、そのような想像された文脈を統一の視点から捉えることの可能性を探ってみる。Bakhtin のサークルを出発点とし、Halliday の機能的言語学の枠組みにおける文脈の位置づけに依拠しながら、Halliday の文脈の捉え方と、歴史学者の Braudel や社会学者の Bourdieu による見識との関わりを検討する。

この考察の結果、言語研究と人文科学および社会科学における諸領域との関わりがより明確に見えてくることで、言語を中心とした学際的研究に貢献できることを希うものである。

2. 社会的文脈における言語

2.1 Vološinov と Bakhtin：社会の中に埋め込まれた言語

W.フンボルトの「活動」としての言語観に触発された M. M. Bakhtin と彼のサークルがとったアプローチにおいては、言葉による相互作用という言語の側面に焦点を当てることで、システムとしての言語観は不十分で不適切であるとして

いる。

続きの議論は、Bakhtin と密接に関わっていた Vološinov の名著『マルクス主義と言語哲学』(Marxism and the Philosophy of Language (Marksizm i Filosofija jazyka)、以下 MFL)⁽¹⁾に基づく。Vološinov は明らかにフンボルトの立場に立っていながら (Matejka 1973、MFL の付録 1、p.167-169 を参照)、創造性としての言語の側面を言語の本質として捉えている「... verbal interaction is the basic reality of language (言語の基本的事実とはことばよりコミュニケーションである; Vološinov 1929[1973]: 94)。Vološinov は言語の社会的本質をさらに下記の通りに述べている。

1. Language as a stable system of normatively identical forms is merely a scientific abstraction, productive only in connection with certain particular practical and theoretical goals. This abstraction is not adequate to the concrete reality of language.
2. Language is a continuous generative process implemented in the socialverbal interaction of speakers.
3. The laws of the generative process of language are not at all the laws of individual psychology, but neither can they be divorced from the activity of speakers. The laws of language generation are sociological laws.
4. Linguistic creativity does not coincide with artistic creativity nor with any other type of specialized ideological creativity...
5. The structure of the utterance is a purely sociological structure. The utterance, as such, obtains between speakers. The individual speech act (in the strict sense of the word "individual") is contradictio in adjecto.

(Vološinov 1929[1973]: 98)

Vološinov にとってコミュニケーションの文脈は、疑う余地もなく社会的なものであり、発話の内部構造さえも文脈の「純粹に社会学的構造」を反映している。この見解は、南 (1974) が明確に示した日本語文の階層性⁽²⁾によっても裏付けられると考える。なぜなら、文の外側の二つの層がコミュニケーションの社会的文脈と密接に関わっているからである。後に明らかになるように、上記の Vološinov の見なし方はさらに、Bourdieu が「主観的」対「客観的」という二分法を超えようと努力した実践理論をも予言しているといえる。

興味深いことに、Vološinov より40年後になって、米国の社会言語学者が同様の考えに辿りついている。例えば、Dell Hymes は、「コミュニケーション行為

や社会的行為の一環としての言語」という観点から、言語学の再考を訴えた：

A “socially constituted” linguistics is concerned with social as well as referential meaning, and with language as part of communicative conduct and social action. Its task is the thoroughgoing critique of received notions and practices, from the standpoint of social meaning . . . Such a conception reverses the structuralist tendency of most of the twentieth century.

(Hymes 1972: 316)

2.2 Coseriu：多面的な現象としての言語

Coseriu (1973) は、言語現象の多様性を把握するために、アリストテレスによる言葉の活動という観点からの捉え方と、ウィルヘルム・フォン・フンボルトによる言語の創造性を重視した捉え方、すなわち、言語をその普遍的側面、歴史的側面、そして個別的側面に分けるという捉え方を、以下の表1のように掛け合わせてみせた。

このような言語概念の分解によって、Coseriu は言語が本質的に多面的現象であるということを明示することができ、言語の多面的な捉え方に貢献した。

表1：Coseriuによる言語概念の分解（Coseriu 1973/1979: 207）

	アリストテレスによる言語の観点		
フンボルトによる 言語のレベル	energeia 活動	dynamis 知識	ergon 所産
普遍的レベル	話すこと一般	発話の知識	話されたことの全体
歴史的レベル	具体的言語	特有言語の知識 ← ラング (deSaussure)	抽象的な言語
個人的レベル	談話 パロール (de Saussure) 言語運用 (Chomsky)	表現の知識 言語能力 (Chomsky)	

表1では、特に de Saussure のラング（「特有言語の知識」）と、歴史的事実、すなわち言語共同体によって話されている特有言語を話すこと（「具体的言語」）との関係が明示的に示されている。Coseriu（同上206頁）が言うように、「特有言語の知識」はまた、言語の活動としての側面、すなわち「具体的言語」、そして「談話」にも影響を及ぼすということである。したがって、言語のそれぞれの側面の関連性を示す矢印が、「具体的言語」から「抽象的な言語」を経由して、「特

有言語の知識」(de Saussure のラング) へ向けられている。逆方向の動きはおそらく暗黙の了解であろう。Coseriu のこのような考え方は、上記で見た Vološinov (1929[1973]: 98) の考え方にも、そして次の 2. 3 節で紹介するハビトゥスという概念によって代表される Bourdieu の考え方にも近い。

2. 3 社会学からの見方：Bourdieu のハビトゥス

文化人類学者・社会学者の Pierre Bourdieu の貢献も重要である。彼が提唱する ハビトゥス (habitus) という概念は言語学とも深く関わっている (Bourdieu 1982/1992参照)。言語とハビトゥスとの関わりは別稿にすでにより詳細に論じたが (ベケシュ 2018)、ここではまず Bourdieu の基本的立場を簡単に紹介する。

Bourdieu は、「外的」とされている社会的自我と「内的」とされている自己が互いにどのように形成していくかという過程を明らかにしようとした。そのためには「社会的」対「個人的」、さらには「主観的」対「客観的」というような二分法を超える必要があった。Bourdieu は、そのために実践理論 (théorie de la pratique) という独特の新しい理論の確立を目指し、その中心的概念として、ハビトゥス (habitus、心身に深く染みついた習慣) を導入した (Maton 2012: 49 を参照)。Bourdieu はまた、合理的行動理論 (RAT) における一般化と理想化、特に言語哲学や経済学等における合理的行為者を想定した様々な理論や枠組みで提案された合理主義的アプローチ (その典型的な例は言語哲学者の Austin の発話行為の理論であるが) に対して批判的な立場をとった。Austin (1962) の行為遂行的発話理論に対して、行為遂行的発話を可能にする社会的条件を無視していると批判的に見ている (Bourdieu 1982/1991: 73参照)。Bourdieu は、行為者が (発話行為を含め) 合理的な計画なしにも体系的に行動することができると考え (Bourdieu & Wacquant 1992: 125参照)、それがなぜ可能であるかを説明するためにハビトゥスという概念を導入した。

Bourdieu はハビトゥスの定義を次第に修正していくが、ここでは、かなり安定してきた *The Logic of Practice* (1990: 53) の定義に拠る。

...[S]ystems of durable, transposable dispositions, structured structures predisposed to function as *structuring structures*, that is, as principles which generate and organize practices and representations that can be objectively adapted to their outcomes without presupposing a conscious aiming at ends or an express mastery of the *operations* necessary in order to attain them. Objectively 'regulated' and 'regular' without being in any way the product of obedience to rules, they can be collectively orchestrated without being the product of the organizing action of a conductor.

The Logic of Practice (1990: 53, イタリックは筆者による)

ハビトゥスとは、永続性があり、別の状況でも応用が可能な (transposable) 振る舞いの様々な傾向の体系である。[これらの諸傾向は行為者と社会的文脈との相互作用によって] 構造化されながら、同時に (相互作用を通じてその社会的文脈を) 構造化する傾向である。

すなわち、[これらの諸傾向は] 諸実践および諸表象 (representations) を生成し、組織化する諸原理である。[このような諸実践および諸表象は、行為者が] 意図的に目標達成を志向することも、目標達成のための明確な技能・知識も前提としなくても、目標を達成するために客観的に応用できる。

[これらの振る舞いの様々な傾向は] 何らかの規則に従った結果の産物ではなくとも、客観的に「統制・管理」され「規則的」であり、行為者による何かを意図的に「準備し」組織した行為の産物ではなくとも、集合的に統制されうるのである。

[訳はベケシュ2018:136-137による]

上記の定義によれば、ハビトゥスの中心的な側面はハビトゥスを構成する振る舞いの様々な傾向 (dispositions) である。ハビトゥスの主な特徴は下記の通りである。まず、ハビトゥスは行為者 (個人、グループ、組織) の属性であり、過去における経験によって構造化された構造体でありながら、遂行中の実践または行為者の未来における実践を構造化する弁証法的性格を持つものである。ハビトゥスは具体的には振る舞いの様々な傾向から一体系として構成されている。

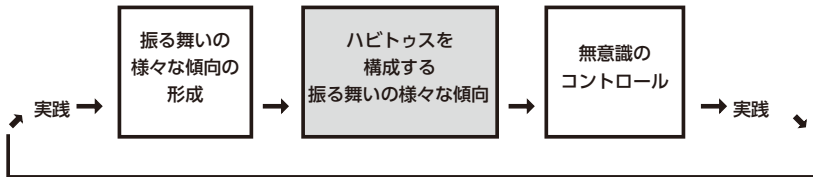


図2 ハビトゥスと実践の弁証法的関係 (ベケシュ 2018による)

ハビトゥスの弁証法的性格は上記の図2に示した。振る舞いの様々な傾向がどのようにできるかという、「次第に心身に染みつき、染みつけられていく」プロセス (inculcation) を通じて獲得されるものである。その際、子供の頃に経験したことが重要である。すなわち、振る舞いの様々な傾向は過去の経験によって構造化されていく。同時に、行為者の実践において、行為者の意図を前提としなくても、行為者の実践を構造化していく。このような振る舞いの様々な傾向は持続する (durable) ものでありながら、実践の生成に寄与するという意味で生成

的 (generative) で、「他領域への応用が可能」(transposable) である (Bourdieu 1977: 85, 92ff, 214 を参照)。

ハビトゥスによって司られている行為者の実践は特定の社会的文脈、フィールド(champ)で展開されていく。一方ハビトゥスは、フィールドとの相互作用によって獲得されていく。

ブルデューの理論において、実践はハビトゥス、フィールドと資本 (capital) から構成されている。ここで、「資本」をさておいて、ハビトゥスとフィールドとの関係において、実践はすなわち、ハビトゥスとフィールドの「無意識的關係」として規定されている (Bourdieu 1980: 119, Bourdieu 1993: 76 を参照)。その関係において、我々が生きている文脈の一部として、フィールドはハビトゥスを構造化すると同時に、ハビトゥスは行為者にとって、フィールドを含め、自らの人生を有意義なものとして理解するための拠り所である (Moton 2012: 51)。ハビトゥスとフィールドとの関わりは図3に示した。

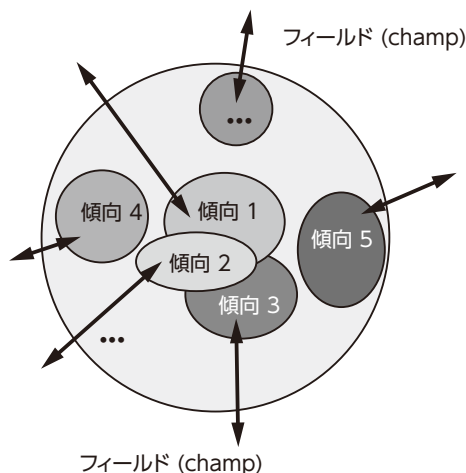


図3 ハビトゥスとフィールドとの関わり (ベケシュ 2018 より)

言語とハビトゥスとの関係はどうか。言語的ハビトゥスを構成する振る舞いの様々な傾向はハビトゥス全体を構成する振る舞いの様々な傾向の一部である。これらの振る舞いの様々な傾向は、「特定の社会文脈 (家族、同輩のグループ、学校など) で話すことを学ぶ過程で身に付けられた。…言語的ハビトゥスは身体に刻みつけられており、身体の姿勢 (hexis) を構成する一要素である。たとえば、特定のアクセントは、舌、唇などの動かし方で決定される。異なるグループやクラスに異なるアクセント、イントネーション、および発話方法があるという事実は、言語的レベルにおける、社会的に構造化されたハビトゥスの現れである」

(Bourdieu 1991: 17の John B. Thompson による編集者前書き)。

2. 4 歴史からの見方：Braudelの「長期持続」(longue durée)

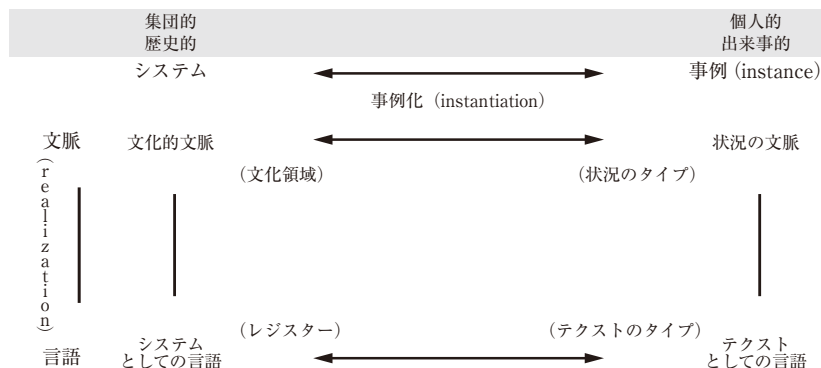
フランスの著名な歴史学者の Braudel (1958) は歴史的現象を捉えるために二つの異なった視点、すなわち「出来事の歴史」(histoire événementielle) および「長期持続」(longue durée) を厳密に区別した。前者は、短時間、すなわち日常的なレベルでの出来事を捉える視点で、歴史上の出来事を記録する記録者の視点である。一方、後者はより長い時間の中で展開していく歴史的現象を捉えるための視点である。「出来事の歴史」の視点において、行為者は主体として捉えられているが、「長期持続」の視点では、行為者は、長い時間の中でしか明確に現れない歴史の動きに全く気づかずにいるということである。「長期持続」という視点は言語学とも密接に関わっていると Braudel はいう。彼の見方では体系としての言語がそうである。文法化、出現する (emergent) 現象 (Hopper 1987) としての言語現象の捉え方なども「長期持続」と同類の視点を取り入れた言語の捉え方である。「長期」のスケールこそ異なっていることもあるが、「長期持続」視点はさらに、その形成プロセスから見ても、無意識であることから見ても、Bourdieu のハビトゥスとも密接に関わっている (Braudel 1958: 745)。

3. Hallidayの機能言語学と文脈

M.A.K. Halliday が提唱している機能言語学 (systemic functional linguistics, 以降 SFL) にとって、科学的言語研究という目的は、言語の働きと社会的文脈との関係の究明である (cf. Hasan 2009: 166)。その結果、SFL の枠内で状況の文脈 (context of situation) のきめ細かい捉え方が提唱されるようになってきた。状況の文脈を記述するために、モード (mode)、フィールド (field) およびテナー (tenor)、という三つのパラメーターに沿った記述は次第に完成度を高めてきた。これらのパラメーターがまた言語のヴァリエーションとも関係づけられてきた。このような社会との関わりに基づいた言語へのアプローチの根底には、Bakhtin および Vološinov などにも共通する、プロセスとしての言語を重視するという視点である。言語体系または個人の言語能力の側面を重視する de Saussure そしてとりわけ Chomsky による、言語のより狭い捉え方では、このような視点は不可能である。言語のヴァリエーションを説明するためには、体系としての言語だけでなく、特定の社会的文脈におけるプロセスとしての言語の側面も研究対象にしなければならない (cf. Hasan 2009: 166-168)。

Halliday (1991/2007) によって提唱され、さらに Hasan (2009: 169) によって改良された下記の状況の文脈のモデルは、まさに体系、すなわちシステムとしての言語とプロセスとしての言語と状況の文脈との関係を明確にすることを目的

としている。



注：・テキストとして事例化される (instantiated) 言語システムと同様、文化は状況で事例化される。

- ・文化は言語で実現/解釈される。両者の関係は様々な言語的階層 (意味、語彙・文法、音韻、音声) の間の関係と同様の、実現という関係である。
- ・文化領域とレジスターは「サブシステム」であり、「システム」側から見た類似である。
- ・状況のタイプとテキストのタイプは「事例化のタイプ」であり、「事例」側から見た類似である。

図4 SFLで提唱されている言語と状況の文脈のモデル (Hasan 2009: 169)

このモデルは二つの実現側面と四つのカテゴリとそれらの関係から構成されている。二つの側面は、システムとしての側面と事例 (instance) としての側面であり、四つのカテゴリは文化的文脈、状況の文脈、それにシステムとしての言語とテキストとしての言語というカテゴリである。言語というレベルと文脈というレベルは自明的である。文化的文脈は社会的文脈のシステムとしての側面である。状況の文脈は特定の伝達行為が遂行されている具体的な社会的文脈である。同様に、システムとしての言語は言語のシステムの側面であり、テキストとしての言語は言語のプロセスとしての側面である。

これらの四つのカテゴリは二つの軸に沿って組織されている。縦の軸は実現 (realization) という関係を表し、横の軸は事例化 (instantiation) という関係を表す。

縦軸に沿って、実現を介在して、二つのカテゴリの対が関係づけられている。まず、(i) 文化的文脈とシステムとしての言語との関係である。そして (ii) 状況の文脈とテキストとしての言語との関係である。いずれも、上位のカテゴリが下位のカテゴリとして実現される。

Hasan はこの実現を次のように説明している。「文化は言語によって実現/解

積される。両者の関係は様々な言語的階層（意味、語彙・文法、音韻、音声）の間の関係と同様の、実現という関係である」（Hasan 同上）。

なお、図4の上部にある灰色の部分は筆者が付け加えたものである。上記の対(i)の文化的文脈は、Braudel（同上）の言葉を借りれば集团的、歴史的、長期持続的側面である。同様に、システムとしての言語は Coseriu 的に言えば、言語の歴史的、集团的側面である。さらに、Bourdieu の枠組みでは、フォーマルなもの、インフォーマルなものを問わず、文化的文脈は公共機関を含め、社会における諸制度(institutions)に相当すると思われる(Bourdieu 1982/1991を参照)。対(i)はしたがって、言語と社会的文脈の歴史的、集团的、システムの側面を代表する。対(i)と対立関係にあるのは、事例的側面の、同様に実現という関係で関係づけられている対(ii)、すなわち、状況の文脈とテキストとしての言語がなしている対である。この対は 特定の状況における対(i)の事例化として、Braudel 的に言えば、言語と社会的文脈の関係において、出来事的、個別的(événementielle)側面である。なお、システム側の対(i)と事例側の対(ii)は構造的に見て、同類である。なぜならば、縦軸に沿って、対(i)の要素も、対(ii)の要素も、「実現」および「解釈」という関係に立っているからである。

一方、横軸に沿って成り立つ関係は実例化(instantiation)という関係である。Hasan（同上 169）が言うように、「実例化は可能性およびポテンシャルとその実例との間の関係である」。

対(iii)というのは、文化的文脈と状況の文脈において、文化的文脈はシステムのな、可能性としての側面に属し、状況の文脈はその具体的な事例である。対(iii)は、つまり、システムとしての言語とテキストとしての言語においても、両要素の間の関係は同類、すなわちポテンシャルとその事例の関係である。このように、対を関係づける原理から見て、対(iii)と対(iv)は同類のものである。システムとしての言語とその事例的側面であるテキストおよびプロセスとしての言語は、弁証法的関係にある。前者は後者の実現および解釈を可能にするポテンシャルである。また後者は前者の維持(maintenance)、変化およびイノベーションのための資材を提供する(Hasan, 同上170-171)。この Hasan による指摘はまた前節で見た、歴史的レベルにおける知識 dynamis と活動 energieia との間のフィードバック的關係という Coseriu の捉え方にも、Bourdieu のハビトゥスと実践との弁証法的関係(図2)にも通じる所がある。ただし、Hasan が結びつけようとしている集团的側面のシステムと個人的個別的側面の事例にたいして、Coseriu の歴史的レベルの要素(表1)は全て集团的・歴史的レベルに属しており、Bourdieu のハビトゥスと実践は個人的・個別的側面のみを重視している。

さらに、Hasan（同上 169）は、システムの側面と事例的側面の違いを現象を観察する時間のスパンの長さの違いとして説明している。システムの側面はより長い時間のスパンの中で現象を観察した結果、観察を理論化した到達点である。

これに対して、事例は直接経験できる具体的なものである。このような捉え方はまさに Braudel が歴史において区別している長期持続的側面と出来事としての側面という考え方に近いものである。Braudel の出来事は SFL の事例と重なっているが、長期持続と SFL のシステムの捉え方は、SFL でシステムが理論化の到達点であるという点において異なっている。

図 4 において、文化領域とレジスターは、それぞれシステムとしての文化的文脈とシステムとしての言語に含まれているサブシステム、またはサブドメインである。両者はヴァリエーションを捉えるために導入されている。文化的文脈の異なる文化領域は、それぞれに対応するレジスターと関係づけられている。言語において、各々の話者および話者の共同体において、レジスターのヴァリエーションは非常に重要である。各々の話者のレジスターのレパートリーはその話者が置かれている社会的地位の重要な指標の一つである。レジスターのレパートリーは、言い換えれば Bourdieu のいう「構造化されながら構造化する構造である」(Bourdieu 1990: 53 Logic of practice, ベケシュ 2018: 136-37を参照)。各々の話者の場合だけでなく、話者の共同体においても同様である (Hasan, 同上 169-171)。

さらに、事例の側では文化領域とレジスターに対応する要素として、具体的な状況の文脈の構成タイプとして、文化領域の一部と思われる状況のタイプがあり、そして同様に、具体的なテキストとしての言語の構成タイプとしての、レジスターの一部と思われるテキストのタイプがある。

4. 状況の文脈モデルの拡張への提案

前節で見た SFL の枠内で提唱された状況の文脈モデルが、翻訳研究から CDA (critical discourse analysis 批判的言説分析、Hodge and Kress 1988、Fairclough 2005 を参照) までの多くの分野で非常に有効的に応用されてきた。

ただし、2 節と 3 節で見てきたように、Bourdieu のハビトゥスの捉え方では、システムのものは集团的、すなわち話者の共同体レベルのものだけでなく、各々の話者のレベルでもハビトゥスが構造的・システムの性質を持つということがわかってきた。

すでに 1 節で言及したように、日本語を中心として行われてきた「キャラ」の研究 (定延 2015, 2018a,b)、および役割語の (金水 2018, Kinsui and Yamakido 2015) では、集团的レベルのシステムに属さない個人レベルにおける言語のヴァリエーションが取り上げられている。ベケシュ (2018) で論じたように、このヴァリエーションを記述するために導入されてきた「キャラ」という概念はまた Bourdieu のハビトゥスとも密接に関わっている。

3 節で見てきた SFL の見方では、提唱されている理論化の到達点としてのシステムの捉え方と各々の話者によるシステムの不完全な把握との関係は、十分に

明確にされているとはいいがたい。Bourdieu に依拠しながら、一つの可能な解決策として、SFL 的理論化の到達点としてのシステムと、Bourdieu (1990: 57) が提唱している、明示的または暗黙上の非明示的規範の集合体としてのシステムを区別する必要がある。したがって、Bourdieu に依拠しながら、図 4 で示されたモデルを拡張する必要がある。そのためには次の三つのステップを取る。

- (i) SFL の本来のモデル (図 4) で、理論家の構築物として見なされたシステムを明示的または暗黙上の、非明示的規範の集合体という Bourdieu 的、Braudel 的システムと置き換える。

図 4 の上記の Bourdieu および Braudel 的に再解釈された集団的システムと個人的・個別的事例のモデルだけでは、個人・個体のシステムの側面が欠けてしまう。

そのために、下記の図 5 のように、

- (ii) 本来のモデルの「集団的」対「個人的・個別的」対立をさらにシステムの側面から明確に表す必要があるから、集団的システムの側面とシステムの個人話者的、個体発生的側面、すなわちハビトゥスとの関係づけをモデルに付け加える。

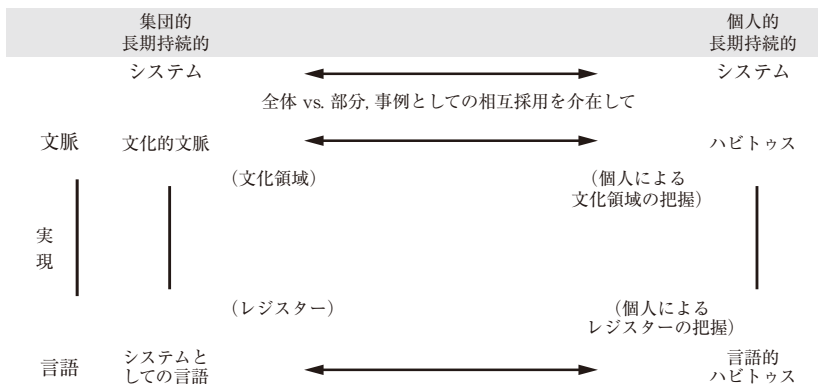


図 5 拡張 1：集団的システムと（個人的・個別的）システム

図 5 では、システムの個人的・個別的側面が集団的側面にある意味で全体と部分の関係である。両方とも、長期持続的であるが、集団的レベルと個人・個体のレベルでは長期持続のスパンが異なっているということも念頭に入れる必要がある。両者の全体と部分の関係は機械的に解釈できるものではない。ハビトゥスは

文化的文脈のサブシステムではあるが、文化的文脈との関係は Bourdieu 的に言えば、図 2 で示されたように、各々の個人・個体の、状況の文脈との相互作用（実践）の事例を通じての弁証法的関係である。換言すれば、共同体の一員である個人・個体が自らのハビトゥスを介在して、文化的文脈という集団的システムにおいて他の個人・個体と相互作用する。この相互作用は逆に、個体のハビトゥスと同時に、文化的文脈も形成し変えていくものである。

さらに、(ii)に加えて、言語と状況の文脈の関係のモデルに、「システム」対「事例」という対立を個人・個体の個別的側面から、下記の図 6 のように、明確に表す必要がある。そのために、

(iii) システムの個人話者的、個体発生的側面、すなわちハビトゥス、と事例的側面を関係づけるモデルを付け加える。

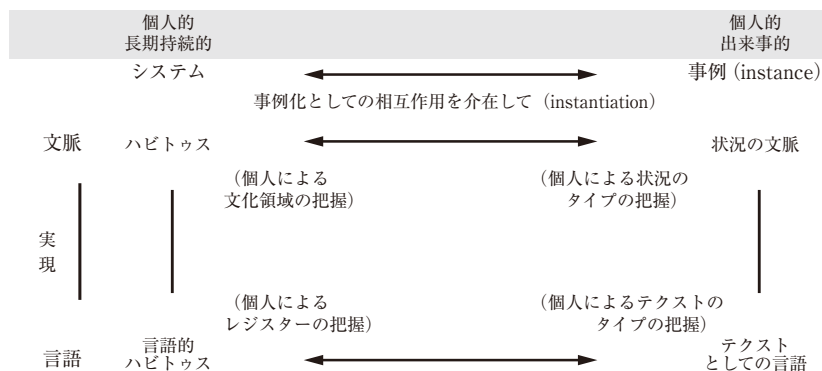


図6 拡張2：個人的システムと（個人的・個別的）事例

図6では、ハビトゥスとしてのシステムと事例との関係は事例化によるものである。厳密には、個人・個体のハビトゥスに司られている Bourdieu 的実践としての事例である。図6のサブカテゴリである文化領域、レジスター、状況のタイプおよびテキストのタイプも、個人・個体のハビトゥスを介在して把握されたものであると考える。

言うまでもなく図5、図6において、縦の関係は全て「実現」という関係である。同類でありながら、上部のより広いカテゴリーが下部のより狭いカテゴリーとして実現されるのである。

5. おわりに

コンテキスト・文脈は、言語を含めて人間の営みを理解するために欠かせないものである。本稿では言語と状況の文脈との関係を探り、de Saussure の対話する頭たちという単純なイメージから、2 節で、Bakhtin, Vološinov, Coseriu, Braudel と Bourdieu の社会と言語の関係についての考え方を簡単に紹介した。3 節では Halliday および SFL が提唱する言語と状況の文脈との関係を表す、完成度の高いモデルを論じてきた。このモデルではさらに、言語的行為を含めて人間の社会的行為を理解するために、Bourdieu および Braudel 的考え方を付け加え、なんらかのアプリオリな説明の拒否のためにうまれた Bourdieu の実践の理論およびその中心的概念であるハビトゥスと Braudel による長期持続的視点と出来事的視点を取り入れながら、SFL のモデルの拡張を試みた。Bourdieu と Braudel に依拠しながら SFL のモデルを再解釈し、拡張した結果できた図4、図5と図6を、下記の図7のように立体的な構造体として統合することができる。図7の上と下の灰色の部分、上記の図4、図5、図6と同様、Braudel 的捉え方に沿って付け加えた部分である。

図7では、本来の SFL のモデルは左右の軸に沿って表示されている。Bourdieu 的な側面は図7の前面にあるハビトゥスの側面と集団的・システムの側面、さらには個人的・個別的事例としての側面とのつながりで示されている。

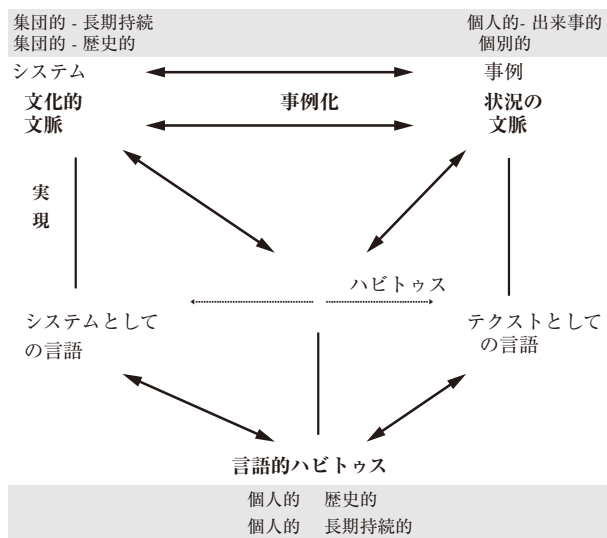


図7 言語と状況の文脈モデルの拡張：統合的モデル

図7は言語研究において、研究対象とされているそれぞれの事柄が、広義での文脈の諸要素とどのようにつながっているかを把握するための一種の地図として捉えることができる。たとえば、前述の、日本が発祥地である「キャラ」の研究は、実践全体を司るハビトゥスと言語的ハビトゥスを含めて、図7のハビトゥスの側面ともしっかり関わっている。

本稿で試みた言語と状況の文脈の拡張モデルはまだ不完全なものである。これからの課題として、まず SFL の枠組みで提唱されているフィールド、テナーとモードという状況の文脈の三つの側面と Bourdieu の実践におけるフィールドとの関係をより明確に考察しなければならない。

ともあれ、言語研究が社会的文脈に注目したアプローチが勢いを増している現在、ここで試みた拡張モデルが言語の学際的研究の発展に貢献できることを願いたい。

注

- (1) 『マルクス主義と言語哲学』の著者が Bakhtin であるという意見もある。
- (2) 文が意味機能から見て4つの層に分けられるという先駆的な研究成果。

参考文献

- Austin, John L. (1962) *How to do things with Words*. Oxford: Clarendon Press. 2nd edn.
- Bakhtin, Mikhail M. (1981) Discourse in the novel. In *The dialogic imagination*, Slavic series: No.1, pp. 259-422, University of Texas Press (Slovo v romane. *Voprosy literatury* 1965 No.8 の英訳; 日本語訳: 『小説の言葉』, 伊東一郎訳「平凡社ライブラリー」平凡社 1996)
- Becker, Alton. L. (1988) Language in particular: a lecture. In Deborah Tannen (ed.) *Linguistics in context: Connecting, observation and understanding*, pp. 17-35. Norwood NJ: Ablex Publishing Corporation.
- Bekeš, Andrej (2015) Afterword: role language and character research in a wider perspective. *Acta Linguistica Asiatica* 5(2), pp. 69-71 <http://revije.ff.uni-lj.si/ala/>, 最終確認2018年8月22日
- (2018) (アンドレイ・ベケシュ)「ブルデューの「ハビトゥス」と定延の「キャラ」との出会い」, 定延利之編『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』, pp. 134-153, 東京、三省堂。
- Bourdieu, Pierre (1977) *Outline of a Theory of Practice*, New York: Cambridge University Press.
- (1980/1993) *Questions de sociologie* Paris: Les Editions de Minuit. (Transl. by R. Nice 1993, *Sociology in Question*, London: Sage).
- (1980) *Le sens pratique*, Paris: Les Éditions de Minuit
- (1982) *Ce que parler veut dire : l'économie des échanges linguistiques*, Paris: Fayard (英語訳 *Language and Symbolic Power*, Harvard University Press, 1991; paperback edition, Polity, 1992; 日本語訳『話すということ——言語的交換のエコノミー——』, 藤原書店, 1993年)
- (1987) *Choses dites*, Paris: Les Editions de Minuit
- (1990) *The Logic of Practice*, Richard Nice 訳. Cambridge: Polity. (*Le sens pratique*, Paris: Les Éditions de Minuit 1980 の英訳)

- (1993) *Sociology in Question*, London: Sage Publications (*Questions de sociologie*, Paris: Minuit, 1980, trans. Richard Nice)
- (1998) *Practical reason: on the theory of Action*, Stanford: Stanford University Press (Raisons pratiques: sur la théorie de l'action, Paris, Seuil, 1994, 『実践理性——行動の理論について』加藤晴久・石井洋二郎・三浦信孝・安田尚訳, 藤原書店, 2007年)
- Bourdieu, Pierre. and Loïc Wacquant (1992) *An Invitation to Reflexive Sociology*, L. Wacquant (trans.), Cambridge: Polity. (*Reponses. Pour une anthropologie reflexive*, Paris: Seuil, 1992 の英訳)
- Braudel, Fernand (1958) Histoire et Sciences sociales: La longue durée. In: *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations*. 13e année, N. 4, pp. 725-753.
- Chomsky, Noam (1965) Aspects of the theory of syntax. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press
- Coseriu, Eugenio (1973) *Lezioni di linguistica generale*. Editore Boringhieri (『一般言語学入門』三修社, 1979年, 2003年第2版, エウジェニオ コセリウ著, 下宮忠雄訳)
- Čermák, František (1995) Prague School of Linguistics Today. *Linguistica Pragensia* 1, 1995, 1-15.
- (1997) Synchrony and diachrony revisited: was R. Jakobson and the Prague circle right in their criticism of de Saussure? *Folia Linguistica Historica* XVII/1-2 pp. 29-40. Societas Linguistica Europaea.
- de Saussure, Ferdinand (1916/1966) *Cours de linguistique générale*, 1916. Eng. transl. 1966 Wade Baskin, *Course in General Linguistics*, New York: Mac Graw-Hill)
- (フェルディナン・ド・ソシュール) (1972) 『一般言語学講義』小林英夫訳, 東京、岩波書店。
- Norman Fairclough (2005) Critical discourse analysis, *Marges Linguistiques* 9 pp. 76-94.
- Giddens, Anthony (1989) *Sociology*. Cambridge: Polity Press.
- Goffman, Erving (1956) *The presentation of self in everyday life*. Edinburgh: University of Edinburgh
- Halliday, M. A. K. (1978) *Language as Social Semiotic: The Social Interpretation of Language and Meaning*. London: Edward Arnold.
- (1991) The notion of “context” in language education. In T. Le and M. McCausland (eds.), *Language Education: Interaction and Development*, Tasmania: University of Tasmania. Reprinted in *Collected Works of MAK Halliday*, vol. 9 (2007), pp. 269-90. London: Bloomsbury
- Hasan, Ruqaiya (2009) The place of context in a systemic functional model. In M.A.K. Halliday and Jonathan J. Webster (eds.), *Continuum Companion to Systemic Functional Linguistics*, pp. 166-189. New York: Continuum
- 林四郎 (1973) 『文の姿勢の研究』東京、明治図書出版
- Hodge, Robert, and Gunther Kress. (1988) *Social Semiotics*. Cambridge: Polity
- Hopper, Paul J. (1987) Emergent grammar. *Berkeley Linguistics Society* 13: 139-157.
- Hymes, Dell (1972) The scope of sociolinguistics. In R.W. Shuy (ed.), *Sociolinguistics: Current trends and prospect*, pp. 313-333. Washington, DC: Georgetown University Press
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』東京、岩波書店。
- (2018) 「キャラクターとフィクション——ジブリアニメから村上春樹まで——」, 定延利之編 『「キャラ」概念の広がりや深まりに向けて』, pp.XX-YY, 三省堂。
- 金水敏編 (2007) 『役割語研究の地平』東京、くろしお出版

- (2011)『役割語研究の展開』東京、くろしお出版
- Kinsui, Satoshi and Hiroko Yamakido (2015) Role Language and Character Language, *Acta Linguistica Asiatica*, 5(2) pp. 29-42, <http://revije.ff.uni-lj.si/ala/>, 最終確認2018年8月22日
- Matejka, Ladislav, 1973 On the first Russian prolegomena to semiotics. Appendix 1, in Vološinov V. N. (1973)
- Maton, Karl (2012) Habitus. In Michael Grenfell (ed.) *Pierre Bourdieu: Key Concepts* pp. 48-64 London: Routledge
- 南不二男 (1974)『現代日本語の構造』大修館
- 定延利之 (2011)『日本語社会のぞきキャラくり：顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂
- (2015) “Characters” in Japanese communication and language: an overview, *Acta Linguistica Asiatica* 5(2): pp. 9-27 <http://revije.ff.uni-lj.si/ala/>, 最終確認2018年8月22日
- (2016)『コミュニケーションの言語的接近』東京、ひつじ書房
- (2018a)「キャラ論の前提」, 定延利之編『「キャラ」概念の広がりや深まりに向けて』, pp.10-45, 三省堂。
- (2018b)「日本語社会における「キャラ」」, 定延利之編『「キャラ」概念の広がりや深まりに向けて』, pp.120-32, 三省堂。
- 時枝誠記 (1955)『国語学原論・続編』岩波書店
- Toman, Jindřich (1995) *The Magic of a Common Language: Jakobson, Mathesius, Trubetzkoy, and the Prague Linguistic Circle*. Cambridge, Mass.: The MIT Press
- Vološinov, Mihail N. (1929) *Marksizm i filosofija jazyka*. (『マルクス主義と言語哲学—言語学における社会学的方法の基本的問題』, ミハイル・パフチン著, 桑野隆訳, 未来社 1989; *Marxism and the Philosophy of Language* 1st Edition, Ladislav Matejka, I. R. Titunik (trans.), New York/London: Seminar Press, 1973; *Marksizm in filozofija jezika*, Marko Kržan (trans.), Ljubljana: SH 2008)

謝辞

本研究はスロベニア共和国 ARRS による支援を受けたプロジェクト「P6-0243 (A) Azijski jeziki in kulture (アジアの言語と文化)」の一環として行われた。